

総合サイクル企業のサイクルラース（本社＝東京都大田区）は、サーキュラーエコノミーの実現に向けた事業展開を加速させている。近年は金属スクラップのリサイクルや産業廃棄物の処理に限らず、中古品リユース事業やDXツールの開発にも取り組む。福田隆社長に今後の事業展開などを聞いた。

な営業活動などを通じて集荷を進めたことで、金属スクラップと産業廃棄物を合わせた月間取扱量は前年比増で推移している」

——直近の業績について。

「東港金属の25年12月期決算は前期比で増

生産量は年後半にかけて初期目標値に近づき、収益面にも好影響をもたらしつつある」

——現在10社となった事業会社の現況は。

「これから特に成長が期待できるのが、欧州製環境機械の輸入販売を行うサチースと、IT事業やリソースを手掛けるトライシクルになる。サチースは、例えばアルミ展伸材メーカーにおいてリサイク

ーキュラー・ネットワークや五十鈴、豊田通商さんと業務提携を開始した。大手企業からもITとリユースの取り組みが注目されるようになってきている。新たな循環型ビジネスモデルの構築を目指して協業をさらに進めたい」

——リユース事業の強化に注力している。

「BtoB分野で遅れている業務用リユースを推進し、その過程

伸材向けなど素材特性に応じたりサイクルが可能だ。このように商品起点で入荷を管理することで、高度リサイクルがしやすくなる」

——トライシクルではリサイクル業界のDX化に向けた取り組みが進む。

「産廃・建廃委託契約書の電子化システム『エコドRAFT with hクラウドサイン』はDX化の一步目として

術積み上げ

「3月頃までをめどに、千葉工場に1600トギロチンシャーを導入する予定。鉄スクラップの加工能力を向上させ、高炉・電炉メーカ向けに高品位の原料を供給していくのが狙いになる。また昨年には京浜島工場（東京都大田区）の第7ヤードに蘭二ホットド製

する込み銅の供給量を
増やすなど安定供給に
努める。不適正ヤード
の問題は全国的な規制
措置が検討され、確実
に適正化の方向に進ん
でいる。われわれリサ
イクル業者にとつて追
い風となるはずだ」
——グループとして
の課題はあるか。
「リユースからリサ
イクルへとつなぐ商品
位リサイクルの推進が
最重要課題になる。ま

——2025年の事業環境を振り返って。

「鉄、非鉄スクラップはいずれも発生薄が続いた。これは工事現場での資材高騰や人手不足、働き方改革などを背景とした工期遅延をはじめ、自動車メーカーの減産、外資系業者へのスクラップの流出など複合的な要因があるとみる。需要面も生産活動が盛ん上がり、を欠いた伸銅向けのほか、製錬メーカーなどにもスクラップが納めづらな状況だった。ただ当社の集荷環境に限って言えば、年前半は原料調達に苦戦したものの、年後半は積極的

高度循環へリユース注力

非鉄相場の上昇による影響が大きい。前期比で若干減益となった要因としては、主力拠点の千葉工場（千葉県富津市）で固形燃料RPFと製鋼用副資材2種類の生産ラインや、ブラスチックの高度リサイクルのための選別装置の導入など設備投資に伴う減価償却負担が増したことがある。一方でRPFと製鋼用副資材2種類合計の月間

ル原料の利活用が拡大する流れにある中、取り扱う高度選別装置の重要度が増しているなど伸びしろが大きい。鉄リサイクル分野での磁力選別機や、銅・アルミなど非鉄金属の分別収集に使用する光学選別機などは安定した引き合いが見込める」

「トライシクルは昨年、企業間リユースの拡大に向けて葉巻リサイクルのFGLサ

で鉄・アルミを中心とした高度リサイクルを実現するのが目的だ。特にアルミの展伸材リサイクルなどでは、入荷段階からの管理が重要になる。例えば、データーセンターの中古サーバーを回収した場合、リユース可能なものは再販売し、リユースできないものはリサイクルに回すが、中古サーバー由来と分かれば鉄は高炉材、アルミは展

分かりやすいサービスで、ここ数年は契約者数が急激に伸びるなど手応えを感じる。一方、中古オフィス用品のインターネット売買アプリ『ReSACCO（リサコ）』も含めて利用者数が増加する中で、新規ニーズや稼働増加への対応のためにシステム強化の必要性が高まっている。今後は対応力強化を目指し、エンジニアの確保にも力を

再生資源製

クリサイクルを推進していく」
 ——26年の展望を。
 「昨年後半にかけて一部銅製錬所が実施した定修が終わり、26年はフル生産に戻っていくと予想される。製錬向けの銅スクラップは一定の需要が見込めるだろう。当社としては行ききの品種を積極的に集荷したり、シュレッターラインの稼働率を上げ、そこから発生

製冶金業化を進めるリサイクルにとつては技術者の確保も課題だ。例えば素材メーカーと取引する中で、工程管理や品質管理に関する技術的な共通理解が足りていないと感じる時がある。製冶金業出身の技術者の採用などを進め、生産技術の知見を積み上げていかななくてはならない」

(欠端 優太)

(欠端 優太)